文芸作品の鑑賞能力について

——高校生の場合——

高　瀬　允

要　旨

1　はじめに
2　教科書に見られる鑑賞設問
3　設問の難易度
4　鑑賞における問題点
5　能力の向上について
6　結語として対応策について

Ⅰ　高校国語科の授業において文芸作品がとりあげられる場合，それは必ず鑑賞という作業をともなうものである。しかるに中学校の教科書においても，このことは共通であるが，生徒の能力とかなり遊離した作業が現在行われている傾向は否み難い。つまり高校生の鑑賞はどの程度まで要求し得るかの実態調査が充分なされていないといってよい。その結果，中学校の教科書における設問はそのまま高校生にあてはまり，なお且つ難しい問であるといった例も少なからずある。このことは短歌，俳句においていちぢるしい。

それ故，本来漠然とした鑑賞という作業は明確に目標をもって生徒に対することが困難であるのが現状であるとすれば，現場の教師たる者は，生徒の鑑賞能力の実態から把握してかからねばならぬものと思われる。今小論を試みるのはこの意味においてであって，資料の不備と，調査対象の制限のため，意にまかせぬ所があるが，何らかの見通しの一助となれば幸である。なお，問題の性質上，生徒にとって解釈という作業を比較的必要とせぬ現代文学に調査を限定したこともおことわりしておく。

Ⅱ　教科書に見られる鑑賞設問

学習指導要領では（読むことの具体的目標）として次のようにいう。

1年　○いろいろな詩を味わう。
　　○長篇小説のおもしろさがわかる。
　　○余暇を利用して文学を味わう。
2年　○短篇小説の鑑賞ができる。
　　○古典の鑑賞ができる。

つまり，一年はおもしろさがわかる段階であり，二年で鑑賞がはじまるようである。もちろん，これは便宜的な区分であろう。したがって，現行教科書は，まずこの線にそって教材が配列され，おのおの，創意的な，或は旧態依然たる設問を付している。

現行教科書の構成では，重点のおき方が，大略，一年で小説及び詩歌，二年で和歌，俳句三年で外国文学という配列になるのが共通の傾向であり，この中，特に目立つのは，一年用として例外なく現代文学の作品（主として短篇小説）を単元として立てていることである。試みにその単元にふくまれる作品名を羅列してみると，次のようである。

龍之介	鼻　舞踏会　羅生門	
鷗外	高瀬舟	
直哉	濠端の住まい　ある朝　焚火	
漱石	草枕（部分）	
康成	伊豆の踊子	
春夫	田園の憂鬱	
鱒二	屋根の上のサワン	
独歩	空知川の岸辺　春の鳥	
寛	恩讐のかなたに	
露伴	五重塔	
一葉	たけくらべ	
治	走れメロス	

その他　O・ヘンリー，ヘッセ，ルナール，モーパッサン等があり，いずれも一年用としてのものである。もちろん一年用ときまっていることはなく，他書には二年用として採録されていてもちっとも珍しいことではない。

（参照）　日本書院　国語通信　6号

以上のごとき教材を，例えば鳥山榛名氏は次のように分類する。

イ　作品の内容を中心とする立場

ロ　作品の系列を中心とする立場

そして，（一般的に言えば，高等学校一年においては，ロよりイの方が望ましく，二年，三年においては，ロの立場が学習し易いであろう。それは，イの立場の根底にある読書指導との関係からである。）と言う。

これらの作品の当否はしばらくおいて，現行教科書では必ず，これらの作品に設問が付せられている。その形式を大別すれば，次のようになろう。

A　作品の内容に関して

(1)　主　題

(2)　構　想

(3)　人物の性格

(4)　思　想

B　作品の形式，表現について

(1)　表現の特色，効果

(2)　文体について

C　作品系列について

(1)　作家の特質

(2)　同じ作家の他の作品への展開

(3)　作品評価

D　読後感

以上の如く大別される各項目について，もちろん統一はなく，任意的に按配され，更に問い方自体は，一年から三年への進展をあまり見せないのも奇妙である。もっとも，A，Bの項目では，最近の教科書になるほど，問い方が精細，具体的になってきて，大きく構想をの

べよといったふうのものが減ってきた。この多くについて共通していることは，果して高校生にとって（特に低学年において）これらの設問は答え易いかどうか，高きを望みすぎているのではなかろうかということである。

Ⅲ 設問の難易度

具体列を一つ示してみよう。

教材は芥川龍之介の〔鼻〕であり，所収の教科書は少くとも，3，4種ある。これらの設問を列記して本校生徒（一年生）を対象とした調査の結果である。

◎芥川龍之介の〔鼻〕については各種の教科書によると次のような設問がある。これについて感じた難易の程度を別紙の指示によって記入しなさい。

1 内供の心持の移り変りを書け。
2 内供に対するまわりの人々の心理を調べて見よう。
3 心理描写のすぐれているところはどこか。
4 この作品の主題は何か。
5 この作品の構想を考えて見よう。
6 傷つけられた自尊心を回復しようとして内供の行った方法は何であるか，箇条書にせよ。
(1) 消極的な方法　(2) 積極的な方法
7 弟子の僧が鼻を短かくする方法を行うときの，内供の心理の移り変りをのべよ。
8 鼻の短かくなった内供を見て，笑う人々の心理について説明せよ。
9 再び鼻が長くなる結末の部分で，晩秋の季節がどう効果的に生かされているか考えよ。
10 作者は仏教用語や漢語を使って，文章に特別の効果をあげているが，鼻においてはどうか，調べてみよ。
11 読後感を書け。
12 芥川龍之介の他の作品をよみ，彼の作品の特質について考えて見よ。

調査目的

芥川龍之介の（鼻）における設問の難易度

調査対象

昭和34年9月（鼻）学習後における本校一年生 152名，ちなみに学習した時期は34年6月である。

調査方法

生徒個人の主観による難易判定及び好悪の別を各自で記入の方式

イ 教室で習わない時，これらの設問に接してどう思うか。
ロ 習ったあとの現在ではどう思うか。
ハ これらの設問を解答するのに参考書は必要かどうか。
ニ これらの設問の（好き）（きらい）を書け。

（注）イ，ロ，の2項については，難，中，易，三段階に区分させることにした。

さて，これらの項目の中イは既習の現在問題にならない。後述の能力の向上という点に関係すると思ったので書かせてみたのであるが予期通りの結果であった。ハ，についても殆んど常識的な結果に終っているので，ここには，ロ，ニ，の結果を表示しておこうと思う。

表 I ○　難易度調査結果

（クラス別内訳）

	易		普通		難		難			普通		
		%		%		%	A	B	C	A	B	C
1	100	65	45	29	7	0.4	1	2	4	28	10	7
2	78	51	63	41	11	7	6	2	3	22	23	18
3	69	45	66	43	17	11	10	4	3	23	18	25
4	53	34	72	48	27	17	11	8	8	23	23	26
5	24	15	86	56	42	27	18	13	11	28	30	28
6	120	78	28	18	4	0.2	0	1	3	11	12	5
7	71	47	71	47	10	6	5	3	2	31	19	21
8	70	46	68	44	14	9	7	2	5	27	23	18
9	48	31	70	46	34	22	15	14	5	26	21	23
10	64	42	63	41	25	16	10	13	2	23	23	17
11	37	24	73	48	42	27	20	11	11	28	24	21
12	31	20	62	40	59	39	20	25	14	26	16	20

（計 152 名）

この表によれば

難しいもの　　12，11，5，9

易しいもの　　6，1，2

があげられ，他に4，10，の如きも決して楽でないことを示している。難しいものの中，12はよくある問だが形式的なもので，あまり重視する要はあるまい。この設問は自然にまかせておけば解決されよう。その例証として34年度中の夏休の宿題に課した感想文 150篇中，芥川の作品について書いたものは41篇あり，そのうち29篇が既習の鼻以外のものであったことを筆者は体験している。11は注目すべきもので後述したい。5，9，はそれぞれ目的を異にする設問であるが，漠然とした問い方が難の主な理由と思われる。

易しいものの中，6，1，2はたしかに易しい。記述を追ってゆけばすむからである。むしろ1，2について難と答えた計18名の生徒は記述のうらをよもうとしたために困難を感じ

表 II ○　すき，きらいの調査結果

（きらいなものの数）

	A	B	C	計
1	26	16	20	62
2	27	23	22	72
3	31	22	23	76
4	29	30	26	85
5	43	38	37	118
6	25	18	20	63
7	31	23	23	77
8	31	25	20	76
9	32	29	20	81
10	40	36	30	106
11	50	37	35	122
12	35	36	28	99

（注）この表はきらいなものにはっきり○をつけたものの数で（中位）はふくまない。

ているのかも知れない。この点について筆者は授業の際，設問をかなり委しくして考えさせてみた。

全体的に見て，クラス別のかたよりも少なく，大体妥当な結果のように思われる。つまりあらゆる種類の教材についていえることだが，〔読後感を書け〕という綜合作業がどうも困難の頂点らしく，反対に易しいのは形象的なとらえ方であるといってよかろう。

これによれば，きらわれる順序は，11，5，10，12，4，といったものになり難易度とほぼ一致する。又好かれる順序は，1，6，2，3，7という順になった。これらの順位はさして重要とは思われない。なぜならば，各人の好みがはっきりとあらわれた記入の仕方であり，甚しきは全部きらいとするものが10名前後いるのを見てもわかる。問題は，過半数をこえた項目の性格を各個に討究することであろう。そう見てゆけば，すべて大まかな問い方が決して歓迎されていないことがわかる。そしてまた，読後感という項目が最難ということになりそうである。このような空気は現場の教室においては明らかに察知されるものだから，最近の教科書は，こうした現実の傾向を察知してか次第に具体的な設問になりつつある。これは生徒にとっては好ましいことであるに相違ないし，教師にとっても設問を生かして使うことができるだろう。従来の大設問を羅列するのは実際は見向きもされなかったといってよいだろう。

Ⅳ　鑑賞における問題点

一つの具体例を示して，困難と思われる点をあげてみたが，これらはいかに究明され，対処されるべきかが次の問題であろう。

もともと鑑賞ということばは決して明確な概念規定をされたことばでないにもかかわらず，読後感ということばが高校生に与える印象は鑑賞ということであるらしい。このことは中学校における体験を加味して考えられているのでもあろうが，ともかく鑑賞ということばゆえにその重さに苦しむ生徒は少くない。もっとも，問い方を変えて〔この小説をよんで，どんな感じを受けたか〕としても本質的な困難さは変らない。やはりそこにも鑑賞意識がはたらくからである。それらの生徒について共通に言えることは，つまり（何を書いたらいいかわからない）ということである。

この場合，書くべきことがらが全く存在しないのではなくて，さまざまの要素が矛盾不統一の状態で混在するからである。これらの矛盾不統一を整理し，論理的構成をなしとげることは，やや高次の作業であるといっていい。すると指導にあたって，先ず書くべきことがらの指示が必要だということになる。そしてそれは具体的な事象がとりあげられるべきである。例えば，登場人物の性格，構成のやま場等であって，これらの作業は現在の中学校においてはよく行なわれているようであるにもかかわらず，文章表現となるとたよりない現状から，高校国語科の一つの目標とすべきでもあろう。

〔鴻門の会〕を学習した後，この中の人物について評論を書かせることを，多年教育大付高の尾関氏が試みておられる。その成果（大修館発行漢文教室参照）は創意にみち，すこぶる興味深い。

〔作品を読むことによって，その形象的思惟が，その人の形象的思惟として体験され，その人の意識の事実として実現することが鑑賞なのであって，その心理的特質としては，好きであるとか，嫌いであるとか，その何れでもない無関心状態であるとかいった形をとるのがそ

の常である。〕と西尾実氏はのべ（文芸作品研究序説）又普遍妥当性の根拠を持たないのがその特質である。と鑑賞行為を説明する。普遍妥当性の根拠を全く持たないとすれば，恐らくは教室で共通話題としてとりあげることは不可能である。にもかかわらず，鑑賞作業が課せられるのは，形象的思惟の追体験の可能性の故に外ならない。特に現代文学においては，高校生の年令で既に相当追体験の能力は認められると思う。作者の思考の過程が作品の内容の展開につれて，生徒にもひびいてゆくことは高校生と中学生の一つの目立った差である。ただ，古典においてはそれは十分には行なわれない。これは古典教材と現代文教材の著しい差である。その点からも鑑賞作業が高校一年生から，現代文殊に小説について始められることは誤りではない。

鑑賞の根底にあるものは知的理解である。中学，高校生にあっては，古典教材がこなしにくい存在であるのはここに大きな原因がある。例えば，中学の教科書に山椒太夫がとられると，漢語の難解さは大きな障害となる。それと同じく，高校生の場合，安井夫人では仲平の学問についての記述が難解であり，三年生になっては，中島敦の山月記が又，漢語故に難解となる。いずれの場合をとってみても作品そのものの理解にはそれ程大きな問題ではないであろうが，一つには従来の国語教授上の慣習から，又一つには，生徒自身の知識欲から，大人の読者より以上の抵抗となることは明らかである。もし現行教科書が小説等を採録するにあたって，もう少し親切心を出して，詳細な注釈をつけてくれれば，（現在でも次第に懇切にはなってきているが，章末にまとめてあったり，実際的でない点がものたりない。）この点に関する生徒の悩みは大いに軽減されるに相違ない。特に現代詩を教科書に採録する場合の難解さについては伊藤信吉氏も（文学の創造と鑑賞191p）でふれている。解説を添えることが望ましいのである。

従って，文学教材の場合，解説の是非必要な詩，短歌，俳句などの取扱いに一層の留意が望ましく，その上で，感想文を書いて見よう。という設問が生きてくるのである。

ところで，作中人物の性格，作者の姿勢まで部分的に理解をすすめ，十分に共感しながら，読後感とまとめられると書けなくなる原因はいろいろ考えられるであろうが，結局，読後感⟶鑑賞文⟶鑑賞ということへの漠然とした不安のためであろう。

★短歌，俳句の教材では末尾に，（好きな作品をえらんで鑑賞文を作れ）という設問があるのが普通である。中学二年の教科書ですから，金色の小さき鳥の形して……，ぼたん花は咲き定まりて静かなり……級の現代短歌をならべ，こういう問を付しているが，無理というものであろう。

その不安の原因について，以下の如き項目で調査をしてみた。

○鑑賞文を書くということに漠然とした不安があるとすれば，それはどんな点か，次の項目の中で，自分にあたっていると思うものに○印をつけなさい。

1　鑑賞ということはどんなことか，意味がはっきりしない。
2　読書量の不足のために，比較したいが良い材料がない。
3　他人の意見をきくとなるほどと思うが，自分でははっきりまとまらない。
4　意見はあるのだが，書くのがどうもうまくゆかない。
5　書く内容が少ないので，いつも短い文しか書けない。
6　模範とするものがないので，形式が分らない。

7　自分の着眼点が平凡で，書いても恥しい。
8　思ったとおりを書けと言われると書きにくい。書く目標をきめてもらう方が良い。
9　説明してもらった作品は良いが，一人で他の作品に向うとどうして良いかわからない。
10　自分の考え方に確信が持てない。

項　目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	調査人員
該当数	34	72	79	70	40	23	41	45	25	55	155名

この表によれば，2といういわば前向きの姿勢と，3，4という後向きの姿勢とが目立っている。全体的には不安ということはむしろ少ないのではないかと思われる。その他の意見も徴して見たが，さして出ていないところを見ると，案外，現在の生徒は，まとめ方，書き方の問題でひっかかっているのではなかろうか。そしてもちろん，これらの難点は，クラスで言えば中以下の者に見られるであろう。いま，150名の生徒が書ける者と，書けぬ者（うまく書けぬ者）とほぼ半数ずつに分れた場合でも，課題作文として提出させれば，真実書けぬ者は皆無に近い。何とか書いてお茶を濁すことは承知なのである。ただこれらの生徒が自己を忠実に現わしているか否か，また自己の表現に不満感が残るか否か，の程度の差となり，彼等自身の内心の感情そのものの差とは言えない。したがって，これらの発表された文章が，すぐそのまま能力差として片づけられている現状は正しいとは言えないと思われる。優秀者はむろん存在する。それはそれでよいのだが，問題はむしろ，劣弱者の究明ということである。

既に見たように，いま調査対象とする150名は（鼻）において，作意を十分，理解し共鳴し得た筈である。そう断定する理由は，学習前と学習後の理解度の差について，各人が殆ど，理解し易くなったという進歩をみとめているからである。（表Ⅰ参照）すると，この約半数が低迷しているのは，一つの別な問題，つまり創作という問題にぶつかったためと言って良いであろう。

鑑賞という行為は，本来自己の主観にもとづくものであり，古人の言の，忘我恍惚境につくされるとすれば，それは必ずしも表出を強制すべきことではあるまい。もし表出を要求されるとなれば，それは鑑賞を根柢とした創造活動なのである。この創造活動は必ず，これらの文芸作品に即して行われねばならぬ必要性を持たない。もちろん，あっても差支えないが，今日の如く，生徒の負担を無視して必ず記述しなければならぬものではないであろう。要は創造意欲と目標を与えられ表出意欲が高まることであり，その際に習慣の果す役割が大であるということである。もし適切な目標が与えられ，内面的意欲が昂揚すれば，記述による発表もさして難事ではない。したがって，最も注意すべきは，完成された鑑賞批評文として，生徒の読後感をながめる教師側の態度である。文という形体を具えているがために，とかく，われわれ自身がそこを見誤るのではないであろうか。

そしてこのことは特に印象批評の優位性ということと関連する。印象批評はある面において興味もあり，かつ入り易い面があるにかかわらず，論理的一貫性を失い易い。殊に高校生などの場合，断片語の羅列になるおそれが多い。批評という場合，それを例証するとすれば，同一作者の他作品を引用しなければならぬ場合が多い。とすれば，むろん，高校生にとって手にあまる事となる。自分の考に確信が持てぬという不安が常につきまとう結果になる

のである。

もちろん，表現能力（創作能力）に個人差があることは認めなければならないが，それがたとい，劣っていたとしても，発表を妨げるほどの支障とは考えられない。そのことは（山びこ学校）や各種読書サークルの実態について報告されたものを見れば明らかである。これらの場合，生活の実態がバックとなって，彼等は問題意識が明瞭であり，ゆるぎのない姿勢でうけとめる所が特色である。そしてそれは具体的体験の世界である。それに比して一般に高校生の場合，主に関心は心情の世界に向けられ，思弁的，抽象的である。そしてそこにある生活意識は極めて概念的である。そこでは常に問題意識が稀薄であり，いわば地についた感覚ではないのである。それ故，高校生の特徴としてあげられる自我意識あたりから，作品に対する共感の世界が開けてゆくものと思われる。

近年，問題意識喚起の文学教育ということが叫ばれた。西尾実氏は次の如く言われる。

1　鑑賞者の主体的真実の自覚を深化し，そこに喚起された問題意識の追求を指導すること。

2　鑑賞によって喚起された演出的意欲，創作的意欲を指導すること。

3　同じく研究意欲を指導すること。

これに対しては付加的意見が，荒木繁氏によってのべられている。即ち，読者の主体的真実性が客観的真実性に高まる必要がある。たしかに，個人の心内に喚起された問題意識はそのまま共通の場において発表はできない。そのことは高校生の年令において自覚されている事柄である。とすれば客観的真実性を得んがためのあがきが結局彼等の最も問題とするところであるに相違ない。そして，客観的真実性はこの年令層にあっては芸術性という本質的な問題へじかにぶつかるからである。もし問題意識を重視するならば，この問題意識をどう指導したら良いかという，はるかに大きな問題と終始対決しなければならないのである。

しかし，問題意識喚起ということは方法論的には確かに正しいであろう。そして，これを実際に行なってゆけば，現在の高校生の知的偏向を矯正する一助となるかもしれない。問題は芸術性の探究ということが，そこに至るべき階程をとりさられながら，なおかつ目の前にぶらさげられていることなのである。

ともかく，これらの問題を通して，鑑賞作業に際しては，常に生徒の立場からはじめるべきこと，生徒の実生活体験が基底となるべきことは重要なことであろう。そして少数の生徒の持つ，発表力の不足という問題は，訓練を重ねることにしか解決は見出せない。その際，教師側で適当な能力別指導ということが必要であろう。なかなか困難なことではあるが，学校においてこそこうしたことが正当に行なわれるべきである。

参考までに生徒の〔鑑賞について〕の考をあげておく。

（その一）

〔鑑賞〕とあらたまって考え直すと実際，言葉の意義がどうも明確ではない。私達が一般に考えていることは，（優れた名作を充分に味わうこと。）とも言える。しかし，その作品を〔名作〕として指定されて読むことは，私にはどうも気がパッとしない。

いや，私の考えるのは，いかなる文章でも誰の作品でも一応形となって現われているものを吟味して読み，自分の経験や生活，思考と照らし合わせながら批判し考える。決して今か

ら鑑賞しようというような固苦しいものではない。自分が折にふれて好きな時にある文章を読み，その結果，何らかの感情を（読むこと）により得る。そして高校にもなれば，その感じたことにより，自分の人生に何らかの形でおのずから徳を収穫することができると思う。それで充分ではなかろうか。そして〔鑑賞〕とあらたまって考えた場合，人間は非常に味わうことを気難しく窮屈に思い，自然と読書が嫌いになるのだと思う。結論を急ごう。つまり私の考は，楽な気持で作品を味わい，何かの感情を得て，自分の生活に微かながら結び付ける。これが鑑賞ではないかと思う。主張したいことは，極めて楽な気持で味わう，ということだ。良く考えると自分の考自身もわからなくなってくるようなことばだと思う。

（その二）

〔鑑賞文〕なんて固っ苦しいことばだろう。

〔××の鑑賞文を発表します。この作品は非常に作者の性格が現われていると思います。（作者と附合ったこともないくせに，）この作品は大別すると四つに分けられます。まず一段目で主人公の心の動きはどうだ，こうだ……〕聞いていると，一つの作品からこうも感想があるのかと思って全く自分の読書態度に疑問が生ずる。（作品といっても主に小説についてであるが，）僕の読書方法は，唯漫然と話の筋を追っているに外ならない。つまり，どういう経過をたどって，結末がどうなったか，が重要なのであって，何ページのここの人物描写はどうだとか，秋の風景が人物の心の動きをよく表現しているとかいうことは，どうもこの次になる。どうも本を読む態度がなっていない。第一，そんなに気をつかって，本とにらめっこをしていたら，僕には本を読む面白さがなくなってしまいそうである。しかし，小説においては，〔鑑賞〕という語に辟易する僕も，シナリオに対する時は，いささか違った気分でそれに臨む。なぜなら，登場してくる人物の性格や主題は，ほとんどそのセリフで決まり，又そのセリフの持つ意味のとり方も自由である。人間のしゃべることばだから，解らぬ語句なんかはめったに出てこない。小説では一つ一つの人物の動き，主題が一応定義づけられてしまうが，シナリオではいくらでも反撥しようと思えばできる。まあ，こんな所が，小説なんかよりシナリオを考えながら読むことを好む理由であるが，複雑で長いものをよみこなせない頭の弱さと，ある程度自信を持って人に反撥できる好戦的な性格（あるいは反抗期の特徴）がシナリオを読ませる原因であろう。

V　能力の向上について

前述の調査の対象であった一年生 150名の実態からのべて見よう。

A　文芸作品に対する一般関心度

(1)　文芸作品に興味を有する。 88/155　56%

(2)　文芸作品に興味を持たない。36/155　23%

具体例を示せば，書店で新刊小説などに注意することがあるものは28%ないものは56%であり，外国の作家，作品については知らない方だと思うもの52%普通だと思うもの42%であって，関心はあるがあまり読んではいない実状であろう。

B　読書の習慣（文芸作品について）

(1)　時々よむ。　87/155　56%

(2)　めったによむことがない。　28/155　18%

C　読書の環境

(1)　図書館でよむ。　83　53%

(2) 自分の家の本でよむ。　53　34%

(3) 他人の本を借りてよむ。　27　17%

(4) 自分以外に家族の中で文芸作品の好きなものがいる。　73　47%

(5) 自分以外に家族の中で文芸作品の好きなものはいない。　54　34%

そして，読む時は，ひとりでよみ考えるものが63%又友人の影響でよむことが多いもの20%となる。

D　読書後の問題

(1) 読むのは好きだが，読後感想を話したり，感想文を書くのはいやだ。　99　63%

(2) 家人と感想を語り合うことがある。　15　0.9%

(3) 或る作家の作品を教科書で習うと，同じ作家の他の作品も知りたくなってよむ。　40　25%

また，これらの生徒は，夏休みの課題である。〔読書感想文〕を次のようなものについて書いている。

A	日本現代文学			107	65%
	内訳	イ	芥川龍之介　〔鼻〕	12	25%
		ロ	芥川の他の作品	29	
		ハ	他の作家の作品	66	
B	外国文学			13	
C	随　筆			12	
D	歴　史			1	
E	古　典			1	
F	例外的なもの			3	
G	未提出			27	16%

（注）芥川の（鼻）は一学期において習ったもの，また，同じく夏休みの課題である（自敍伝……30枚以上）の未提出者数は，15である。（9月末現在）

また，或る作品の感想文を書く場合，次の種別の中でどれが好きか，理由も書きなさい。という問に対しては，次の結果が出ている。

小　説	92	以下好きなものの数
詩	17	
短　歌	11	
俳　句	9	
シナリオ	11	
随　筆	60	
漢　詩	7	

小説及び随筆が感想文作成の際に共鳴個所が多く，自己の体験と照らし合わせることの可能な点において支持を得ているようである。

さて，鑑賞能力の向上についてであるが，自然向上は問題ないであろうが，それを高校生にあってどのようにとらえることができるものであろうか。一年と三年ではどれ位の差が出てくるものであろうか。いま，その一部として，中学から高校に入っての進歩という点を生徒自身の答に見ることにする。

文芸作品の鑑賞ということは，中学時代と比べて進歩したと思うか，進歩したとすればそれはどんな点か。

(1) 進歩したと思う。 115

(2) 進歩していない。 25

(3) わからない。 15

進歩したという者が圧到的であるが，その進歩の内容は，

○中学時代は主に筋の理解で終ったが，今は内容を深く探究するようになった。特に人物の心理描写に興味が出てきた。

○細かい表現などに注目するようになった。

○対象となる作品が高度になり，作者，文学史的価値に関心が出てきた。

○自己の心情と対比しながらよむようになった。

○現実と結びつけて考える傾向が出てきた。

○作者の人物批判，世間批判がわかるようになった。

○鑑賞文を書くことが好きになった。

○読む量が増えた。

等であり，〔進歩していない〕というのは，時間不足による読書量の低下とか，高校一年として，同級生に比して劣ると思うという解答が多いようであるから，直ちに自己の問題と見なすわけにはゆかない。これら25名の者の好むジャンルは次のようである。

小説	22	7
詩	2	1
短歌	2	1
俳句	1	0
シナリオ	1	1
随筆	22	6
漢詩	1	0
	(進歩についていない者25名)	(わからない者15名)

全部きらいとする者は 155名中 4名であつた。

これらの数字によれば，4名の者を除いて一応関心があり，〔進歩していない〕〔わからない〕といっても，それは低迷の中に次第に向上しつつありと見て良いであろう。

そこで次に高校における進歩の程度ということになるが，これは具体的な調査を行っていないために，ここに詳しくのべる資料がない。いま，この向上の方向について筆者の仮定を申し上げておこうと思う。

1 一年生にあっては小説及び随筆への興味が強いが，これは他のジャンルへも拡大すべきものである。この点については，現行教科書の教材配列の影響もあるが，総じて，韻文への興味は一年生ではまだ湧かないようである。本来，各学年におけるジャンルは特定のものに限定さるべきではなく，また生徒の興味を制限することも許されない。それにもかかわらず，小説及び随筆が有力であるのはたまたま生徒の発達段階に応じて便宜的に行うのにすぎない。実情に即してなるべく，視野の展開をはからねばならないと思わ

れる。

2　その際，散文から韻文への段階には自然推移的なものが見られるかどうか，一つの疑問である。これは個人的な傾向であるのか，或は年令的なものがあるのか。例えば，現行教科書においては，二年用の教材に多く見られる特色は，古今集，新古今集である。また，奥の細道であり，近世俳句である。そこから必然的に，現代短歌，現代俳句ということになる。そして，ここに現われる教材に対しては，多分に批評眼をもって見なければならない。そのことは，最近詳密化する教師用指導書を見ても明らかである。たとえ，これらの現代韻文が発達段階に適応していたとしても，少しく差がありすぎるのではあるまいか。つまり，教室における一人よがりの鑑賞おしつけ主義を注意しなければならない。文学史色と教材との矛盾が見られることが気がかりである。それさえなければ，生徒にとっては甚しくきらわれるということもないようである。

3　三年生頃の問題は批判力ということである。生徒自身もその年令には一応の批判力がつき，しかも対象を独自に処理する独立性が強くなってくる。その際の教科書を見ると例えば，（寒山拾得）の二人の笑いの意味が問われたりしてなかなか難解であるが，面白くもある。個性的な解答を要求できるからである。ただ評論文が必ず現われてくるが，もしこれが，生徒に模範を示すというのであれば，それは見当外れである。文芸作品の評論はその意味では好ましくない。それが他の題材，例えば，科学文明，宗教とかであれば，三年生の発達段階にあって欠くべからざるものであるが。つまり論理性は訓練することができるが，直観的創造性は何とも説明はできないものである。教室において不適当であるのは言うまでもない。

4　史的理解が深化してくることは，鑑賞にとって好都合なことである。鷗外，漱石の名を知り始めてから，数回のくり返しをへて，明治文学史上の位置がおぼろにわかってくる。そしてはじめて作風の理解が深まるという具合に自然と発展するのだが，これができるまでに優に二年間かかったと思うと尊とい。三年生に長恨歌の感想を書かせて見ると，相当に社会批判がでてくる。文学と社会の関連に理解がすすんで来たことを示すものであり，それはまた批判精神のあらわれである。ここではむしろ，あのロマン性に対する純粋な賛歎が少ないのをあやしむ位である。これから見ると，高校三年間の理解の深化と幅とはかなり大きいものがある。

5　以上を綜合して鑑賞力は綜合的に向上してくると言えるのであるが，そのことはつまり，高度の鑑賞批評文を生み出す素地の存在を示すものである。その際，一般の解説書がよい手引きの役割を果すことになろう。むろん，その場合でも能力差はあるといえるが，この段階ではともかく，自己の立場を失うことがめったにない。従って千編一律の感想文はほとんど見られなくなる。現在，もし問題がそこに残るとすれば，それは，論理性の稀薄，説得力の弱さという，技法上の問題にすぎないであろう。

Ⅵ　最後に結論的にまとめておこう。

1　文芸教材を資料とした際の設問は，種類の複雑さと問い方の精粗によって，ある場合は生徒を当惑せしめているのが現状である。これらの整理明確化をはかり，形象的理解の面を重視すべきである。

2　高校生の鑑賞能力は中学生時より，進展して深度を増している。殊に高校三年間において心情理解の進度が著しい。これに対応して指導すべきであるとともに，個人差（能力

の劣る者に対して特に）による指導が留意されるべきである。

3　高学年において見られる社会批判が，文芸作品から密接して生れでてくることが望ましく，手あたり次第的な批判を加える傾向はむしろ作品の読みの不足を物語るものである。その点，教材の解説記事が，一方的な偏向を示さないことが望ましい。

4　鑑賞に際しての参考図書の果す役割りを重視し，今日の出版界に見られる所謂，鑑賞読本の増加に対して適当な指導がなされるべきである。殊に今日では，一種類の註釈書のみに頼れない実状であり，正反対の見方も往々見られるところから，教師側の参考書の解説が必要となろう。古典の註釈書の場合は，割合に行われていることだが，現代文学の場合，見のがしがちである。参考書をよんでも，画一的な影響を受けず，自己の主体性を失わない感想文が書ければ，今日の高校生としては理想的な状態と言えるであろう。自己の生活に根ざし，自己を見つめつつ着実に背伸びすることなく書く態度を身につけさせたいものである。

5　読後感を書かせる場合の技術的な点についてもっと指導する必要があるであろう。この点，筆者も試み中で具体的には言えないが，作品の量の多いものから入るべきだという私見で，目下，芦花の〔灰燼〕をよみ討論会をへて，感想文を書くというプランを立てている。それとともに韻文に対する鑑賞文は時機を見て課してゆかねばならないと考える。印象批評的なものを求めるべきではないというのが筆者の考である。

備考，以上は昨年秋，全国国立大学付属連盟主催の研究会において発表したものに手を入れて見た。大方の御叱正をお願いしたいと思う。